目の前の自然

浅田真一（農学部長）

独り言のような文頭で恐縮だが，2025年の夏も相当に暑かった．そんな夏も気が付くと上着無しでは外に出られないほど寒くなっている．とは言え，ほんの10年ほど前の玉川の農場では冬の数か月間，土が凍てついていた日陰の畑も，最近では時々霜が降りる程度となっている．学生時には大気中の二酸化炭素濃度が280ppmから将来にむかって上昇することを，右肩上がりの折れ線グラフで教わった．確かに今その現実に直面している．

2009年から20年ぶりに玉川の農場で活動を始めた時，驚いたのはナガサキアゲハの数であった．20年前には日本でも南西地域に行かねば見ることのできなかったチョウが，玉川の農場に植えたミカンの苗に産卵している．アオスジアゲハ，ナミアゲハ，キアゲハ，クロアゲハあたりは今でも主力であるが，ジャコウアゲハあたりは見かけなくなってきたように思える．

気候の変動にともなって温暖化が進むことへの対応を，農業の現場でも求められている．ウンシュウミカンの価格が低迷していた1990年頃，全国的な供給過多もあって，消費者にPRすることが難しい状況にあった．そんな中，担当した研究課題が高品質果実を生産できるハウスミカンであった．ただ，これには1月にハウス内でミカンの芽を吹かせなければならず，一番寒い時期にビニルハウス内を20℃程度まで上げる必要があった．毎週のようにタンクローリーで重油を入れ続けなければいけない．これに取り組む生産者は，自身の経営への設備投資には意欲的な方々であった．ただ，高単価で売り上げを伸ばす一方で，大量の重油を燃やし続けることに疑問を持つ生産者もおられた．そんな中，当時の上司がウンシュウミカンから他のカンキツ類への転換を打ち出した．現場でも多くの賛同が得られたが，果樹栽培なので作目の転換には無収入の期間が伴う．そのため，すぐに動けるわけではないが，新たな道を進めようといった機運を感じることができた．この時に出会えたのがローカル品種である‘湘南ゴールド’であった．気候変動の中で社会情勢への対応もしなければいけない農業の現場では，大きな決断を迫られる場面も見られるが，これから先もそれは続くようである．

新たな年度から玉川のキャンパスでは生き物調査に取り組むこととなった．この時代を切り取る形で現状を把握するとともに，過去の様々な記録も併せて整理する予定となっている．文頭には気候変動の影響を受けたと思われるナガサキアゲハにふれた．ただ，気候変動の影響とは別と思われる要因で定着している種類も見られる．かつて，ゴマダラチョウに紛れてオオムラサキの記録もあったこのキャンパスであるが，今では特定外来生物にもなっているアカボシゴマダラがその席についている．近隣ではムシャクロツバメシジミも，よくわからないまま，その分布を広げている．環境は常に移り変わっているようであるが，目の前の自然を見ることは，やっぱりやってみたいと思う．

2026年1月